様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１１７８９

研究課題名（和文）シンガポールの「英語化」にみる歴史観創造と伝統文化継承への影響に関する研究

研究課題名（英文）Writing National History in English and its Influences on Succession of Traditional Ethnic Cultures in Singapore

研究代表者
平島　みさ（奥村みさ）（HIRASHIMA, MISA）

東洋大学・社会学部・教授

研究者番号：４０２９６９４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、独立後50年以上に渡る英語教育がシンガポールの歴史認識と伝統文化継承におよぼした影響と諸問題を解明することにある。シンガポールにおける英語中心の二言語教育については言語学や教育学からのアプローチは多いが、本研究のようにシンガポールにおける言語と社会を結ぶ社会科学分野からのアプローチは少ない。この研究は、英語化による伝統文化継承への影響を分析・考察することにより、社会学分野の研究と言語学分野の研究の橋渡し的な役割を担うものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の目的は、英語化がシンガポールにおける歴史観の創造と伝統文化の継承に及ぼしている影響を文献調査と聞き取り調査によって分析し、新たに生じた諸問題を明らかにする点にある。報告者の視点として特徴的なのは、「英語化によりシンガポールにおいては、本来は『他者』であるはずの英領植民地時代の文化を包摂した独自のポスト・コロニアリズムが形成されつつある」と主張する点である。特に注目するのは、英語圏文化が民族文化の境界を越えシンガポールの国民文化形成に大きな影響を与えている点である。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this research is to investigate the influences and the problems of English- centered bilingual education in Singapore on the visions towards national history and on succession of traditional ethnic cultures.
There already exist many researches based on the approaches from the field of linguistics and education to English-centered bilingual education in Singapore. But there are few researches based on the field of social science like this research, which connects social scientific research and linguistic research by analyzing and observing the influence of anglicization on succession of traditional ethnic cultures in Singapore.

研究分野：文化社会学

キーワード：伝統文化継承　歴史観　英語化　シンガポール　ナショナリズム　ポストコロニアリズム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究の目的は、英語化がシンガポールにおける歴史観の創造と伝統文化の継承に及ぼしている影響を明らかにすることにある。独立後 50 年以上に渡る英語教育がシンガポールの歴史認識と伝統文化継承におよぼした影響と諸問題を中心に論じる。

シンガポールにおける英語中心の二言語教育については言語学や教育学からのアプローチは多いが、本研究のようにシンガポールにおける言語と社会を結ぶ社会科学分野からのアプローチは少ない。この研究は、英語化による伝統文化継承への影響を分析・考察することにより、社会学分野の研究と言語学分野の研究の橋渡し的な役割を担うものである。

２．目的

本研究の目的は、英語化がシンガポールにおける歴史観の創造と伝統文化の継承に及ぼしている影響を文献調査と聞き取り調査によって分析し、新たに生じた諸問題を明らかにする点にある。報告者の視点として特徴的なのは、「英語化によりシンガポールにおいては、本来は『他者』であるはずの英領植民地時代の文化を包摂した独自のポスト・コロニアリズムが形成されつつある」と主張する点である。

特に注目したのは、旧宗主国の言語（英語）で書かれた自国史の記述内容の変遷と、生きられている混淆文化の事例としてのプラナカン（Peranakan）文化である。プラナカンとは、17 世紀以降、交易目的で中国大陸から東南アジア、特にマラッカ、ペナン島に移住した華僑の子孫である。プラナカン文化の特徴として、旧植民地時代から中華、マレー、英国ヴィクトリア朝期からエドワード朝期文化、そして日本文化の影響も受けた混淆文化であることから、近年のシンガポールにおける多文化政策に関連して注目されている。

３．調査方法

調査方法としては、国内での文献調査、シンガポールにおける文献調査、インタビュー調査と参与観察の方法をとった。シンガポールでは、第１に、主に国立図書館で歴史書などの文献調査、第２に、プラナカンの文化復興、振興に従事している方々へのインタビュー調査、第３に、旧植民地地区やプラナカンの人々が多く居住するカトン（Katong）地区における参与観察を実施した。

４．年度ごとの研究成果

【2018 年度】当初の計画以上に研究が進展した。ISA(International Sociological Association) ７月のトロント大会での研究報告に採用され、その際に海外の研究者たちと貴重な意見交換の機会を持てたことは、予想外の成果であった（本文最後に添付した研究成果リスト 6. を参照）。この報告では、日本の京都のオーバーツーリズム問題への対応に英語がコミュニケーション媒体として使用されていることを事例に、本研究のテーマとしている英語化が伝統文化継承に及ぼす影響の一つの事例として取り上げている。この調査結果は、将来的に

はシンガポールにおけるツーリズム政策との比較に際しても議論する予定である。

また、11 月には、所属大学にて日本華僑華人学会が開催され、その大会事務局と研究発表の両方に携わる機会を得、これまでの研究成果を刊行することもできた(研究成果リスト１.、７．を参照)。

【2019 年度】当初の計画以上に研究が進展した。特に９月に実施したシンガポールにおける調査ではシンガポールのプラナカン協会の元会長の自宅にも招かれ、貴重な資料やコレクションを拝見しながらインタビューできたことも予想以上の成果をあげることができた。インタビュー調査では、プラナカンの人々の間で文化継承に関する姿勢が世代によって、受けた言語教育によって必ずしも画一的ではない、多様性があることが明らかになった。

【2020 年度】2018 年度と 2019 年度の調査結果をまとめて３本の論文として執筆・刊行することができ、研究成果を公表できた点からは、大変実り多い一年となった（本文最後に添付した研究成果リスト２．３．４を参照)。

ただし、2020 年 2 月頃から新型コロナ感染者が世界的な規模で拡大・急増する事態となり、報告者に限らず所属大学教員は、国内外での出張がすべて禁止された。報告者の場合は、この年度は特に所属大学から交換研究員として英国カーディフ大にて在外研究の従事する予定があったのだが、出発 10 日前に大学から出国不可の連絡を受け、一年間自宅待機の末、遂に、そのまま在外研究に出発することはできなかった。このため、海外での研究予定はすべてキャンセルとなり、研究計画は大幅な変更を余儀なくされた。

【2021 年度】引き続き、世界的な新型コロナ感染拡大により、国内外の出張は大学から許可がでず、再度研究計画の変更を迫られた。

また、授業もすべてオンラインで実施となり、ステイホームの期間が続いた。報告者の場合は、2020 年度は結果として国内サバティカルのような状況になってしまったため、１年遅れで初めてオンライン授業をすることとなり、ライブ配信とオンデマンド配信の両方の準備と配信の技術的、事務的な仕事に時間がとられ、研究・調査に十分な時間を割くことができなかった。

公開した研究成果としては、前年度に論文としてまとめたシンガポールの観光戦略の中でのプラナカン文化の位置づけについて、オンライン開催の日本国際文化学会で報告することができた（研究成果リスト 8.を参照)。またフランスの女子修道会によってシンガポール、マレーシア、日本に設立されたミッションスクールの現地化とその教育特徴と発展形態の多様性についても、日本カトリック教育学会発行の報告集にコラムとして執筆した（研究成果リスト 5.を参照)。

【2022 年度】9 月にはようやく条件付きではあるが、３年ぶりにシンガポール出張が叶い、現地文献調査と博物館訪問を中心に研究を進めた。出張目的は次の 3 点。①現地での資料収集、関連書籍購入、②大英帝国時代の象徴的文化遺産 （建造物）の現状調査、③National Heritage Bureau（国家遺産局）直轄の博物館、美術館の展示調査と博物館員への聞取り調査である。①と②の調査は十分な 成果を得た。③の調査では国立博物館と

国立美術館、アジア文明博物館は訪問できた。Peranakan Museum、Chinatown Heritage Centre などは引き続き休館・改装中で 訪問・聞取り調査は叶わなかったが、Peranakan Museum は 2023 年 2 月に新装開館したので、2023 年度に訪問予定である。

国立図書館では 1965 年独立の次年度 1966 年～現在の政府発行年鑑のうち、紙媒体発行の 1966 年度～2008 年度年鑑を閲覧し、英国植民地時代と日本占領下時代に関する記述内容と分量の変化を調査した。予想通り、日本占領下時代の記述には日星間の外交的・経済的関係との相関関係が見られた。シンガポール標準英語が英国階層社会の言語からシンガポール多民族社会の共通語へと変化している点が読み取れたのは発見であった。

シンガポールの 独立後の急速な経済成長・国家威信高揚と並行し、自国史の記述は過去へと伸長する傾向がある。特に 2008 年以降、ナショナリズムと考古学との関係が濃くなり、独立 50 周年 2015 年には *Singapore 700 Years* という歴史書まで発刊された。英国植民地時代も「現社会形成初期」から「近代史の一段階」という扱いに変化 している。2022 年度は所属学科改編 2 年目に学科長を担当し、学務に多忙を極めたため、研究成果のまとまった公表は研究会報告のみにとどまった（研究成果リスト 9.,10. を参照）。

次年度はこれまで収集した文献などの資料や調査結果などをもとに、研究成果の執筆、公表を中心に研究を進める所存である。

＝助成期間中に公表した研究成果＝

１.【論文】「シンガポールのミュージアム活動にみる華人アイデンティティ表出の多様化：ディアスポラ、ローカリティ、ハイブリディティ」、『アジア文化研究所研究年報 54 号』、2019 年、pp.142~ 158。

2. 【論文】「シンガポールの文化遺産観光戦略におけるプラナカン文化の表象と商品化」、『東洋大学社会学紀要 58(1)』2020 年、pp.103-116。

3.【論文】「シンガポール・プラナカンのエスニック・アイデンティティと文化継承」、『アジア文化研究所研究年報 55 号』、2021 年、pp.1~ 20。

4.【論文】「シンガポールにおける多文化教育：中等学校社会科教科書分析を中心に」、『東洋大学人間科学総合研究所紀要(23)』、2021 年、pp.109-129。

５.【コラム】「３つの校章の物語ー幼きイエス会設立ミッションスクール現地化の多様性」『日本カトリック教育学会特別企画シンポジウム報告集』、日本カトリック教育学会、2023 年度刊行予定。

6. 【国際学会シンポジウム発表】“Kyoto Speaks out: how the international toursts are changing the way of communication patterns and the social discourse of the people of Kyoto", International Association of Sociology, 20 July 2018, Toronto.

7. 【学会発表】「新華僑が変えるシンガポール華人社会ーミュージアム活動にみる華人エスニシティ表出の多様化ー」、日本華僑華人学会、2018 年 11 月 17 日、東洋大学。

8. 【学会発表】「文化遺産観光戦略における伝統文化の表象と商品化：シンガポールのプラナカ

ン文化を事例として」日本国際文化学会第 20 回全国大会、2021 年 7 月 10 日 、近畿大学（オンライン開催）。

9.【研究会報告】「シンガポール年鑑における英国植民地時代と日本占領時代の歴史記述の変遷」、東洋大学人間科学総合研究所、「ヒトの移動と伝統文化の変容」プロジェクトチーム第１回研究会報告その１、2022 年 10 月 6 日、東洋大学。

10.【研究会報告】「歴史文化遺産と観光（CHIJMES の事例）」、東洋大学人間科学総合研究所、「ヒトの移動と伝統文化の変容」プロジェクトチーム第１回研究会報告その２、2022 年 10 月 6 日、東洋大学。

以上。

平島みさ（筆名：奥村みさ）
2023 年 5 月 16 日作成。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 奥村みさ	４．巻 58-1
２．論文標題 シンガポールの文化遺産観光戦略におけるプラナカン文化の表象と商品化	５．発行年 2020年
３．雑誌名 社会学学部紀要	６．最初と最後の頁 103～116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 奥村みさ	４．巻 55
２．論文標題 シンガポール・プラナカンのエスニック・アイデンティティと文化継承	５．発行年 2021年
３．雑誌名 アジア文化研究所年報	６．最初と最後の頁 1～22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 奥村みさ	４．巻 23
２．論文標題 シンガポールにおける国民統合政策としての多文化教育―中等学校教科書分析を中心に―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 人間科学総合研究所紀要	６．最初と最後の頁 109～129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 奥村みさ	４．巻 54
２．論文標題 シンガポールのミュージアム活動にみる華人アイデンティティ表出の多様化―ディアスポラ、ローカリティ、ハイブリディティ―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 （東洋大学）アジア文化研究所研究年報	６．最初と最後の頁 142-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 平島（奥村）　みさ
２．発表標題 文化遺産観光戦略における伝統文化の表象と商品化：シンガポールのプラナカン文化を事例に
３．学会等名 日本国際文化学会第20回全国大会、2021年7月10日、近畿大学（オンライン開催）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Misa Hirashima
２．発表標題 “Kyoto Speaks out: how the international tourists are changing the way of communication patterns and the social discourse of the people of Kyoto”
３．学会等名 International Association of Sociology（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 奥村（平島）みさ
２．発表標題 「新華僑が変えるシンガポール華人社会―ミュージアム活動にみる華人エスニシティ表出の多様化―」
３．学会等名 日本華僑華人学会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

【コラム】
「３つの校章の物語ー幼きイエス会設立ミッションスクール現地化の多様性」『日本カトリック教育学会特別企画シンポジウム報告集』、日本カトリック教育学会、2023年度刊行予定。

【研究会報告】
1.「シンガポール年鑑における英国植民地時代と日本占領時代の歴史記述の変遷」、東洋大学人間科学総合研究所、「ヒトの移動と伝統文化の変容」プロジェクトチーム第１回研究会報告その１（2022年10月6日）
2.「歴史文化遺産と観光（CHIJMESの事例）」、東洋大学人間科学総合研究所、「ヒトの移動と伝統文化の変容」プロジェクトチーム第１回研究会報告その２（2022年10月6日）

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関